

## 立ち見客が出るほどで公演は大成功。一方で国際交流における日本の問題点も。

2009年10月25日～11月1日の日程で、国連合唱団の公演と交流活動が日本で行われた。

東京と宇都宮で行われた公演は大盛況だったが、国際交流における日本の問題点も見えてきた。合唱という共通語で結束した国連合唱団の活動は、「演奏会」という概念ではとらえきれない波及効果を持っている。

国連職員も「人間」。

その人間性を保つために生まれた合唱団。

国連と聞いてどんなイメージをもたれるだろうか。日本人の多くが国連という存在は知ってはいるものの、その実態を知る人は少ないだろう。まして国連合唱団となると、どんな組織なのか皆目見当がつかないに違いない。

国連本部職員は、世界各地の紛争解決と恒久平和の

実現、持続可能な開発の推進などの業務に従事している。その業務では時として想像を絶する困難な状況に直面する。あまりに悲惨な状況を前に、自分の職務を忘れることもある。また、現地にとけ込めないという障壁に悩むこともある。そこで単に国連職員の立場に留まることなく、世界の人々の心に訴える行動が不可欠との認識に立ち、その一環として音楽や歌を通じて平和実現に寄与しようということで活動しているのが国連合唱団だ。構成員は国連本部や関連機関の職員であり、人種も国籍もさまざまな人が集まった合唱団である。

1947年の発足当初は、職員間の連帯や交流を目的としたものだったが、徐々に活動範囲を広げ、今では世界各地で公演活動を行い非公式の親善大使の役割を務めている。もちろん、ボランティアだから出演料は一切とらない。



東京・丸の内で行われた「藝大アーツ イン 東京丸の内」公演の様子



鳩山幸前首相夫人も合唱に飛び入り参加



参議院議長公邸を表彰訪問し「赤とんぼ」を披露



立ち見客が出るほど大盛況だった宇都宮公演

その国連合唱団が日本にやってくるようになった。国連組織が来日するとすれば外務省が動きそうなものだが、非公式の立場のためかまったくなんの援助もない。日本での企画運営は国際友好文化交流協会(柴田静峯理事長)に委ねられることになった。

国連合唱団日本公演実行委員会の柴田静峯事務局長は次のように語る。

「国連農業開発基金副総裁などを務められた柴田孝男さんと現国連事務総長室上級補佐官の池亀美枝子さんご夫妻とは以前より交流がありましたので、そのような流れになったのです」

こうして実行委員会が作られたのが2008年5月だった。公演予定まで1年半。東京とどこか地方都市での2回公演という合唱団からの要望に応えるには準備時間はほとんどない。予算はそれ以上がない。同委員会はそれまで交流のあった団体等に協力を要請して回った。

公演は大盛況で、施設訪問での交流でも収穫をあげる。

音楽コーディネイターは東京藝術大学 音楽学部教育研究助手の毛Y(マオヤ)さんと決まった。もともと今回の招聘は2008年に毛Yさんが国連本部で古箏の演奏を行ったことがきっかけでもあった。その関係で、同大学の「藝大アーツ イン 東京丸の内」への共同出演が最初に決まった。次に500名という日本最大級のメンバーで構成される栃木県の「ザ・コーラス静輪」とのジョイントが決まる。短期間に企画の大枠が固まったのは同委員会メンバーのそれまでの活動と人脈の成果だろう。

最大のネックとなっていた予算についても、AJOSCを始めとして協賛を得ることで何とか、めどがついた。

コンサートの様子はとても言葉で語れるものではないが、大成功とっていいだろう。宇都宮で行われた公演では、会場は満員で二重三重の立ち見客が出るほどの盛況であった。

「オバマ米大統領が国連中心主義を訴え、鳩山首相が国連で発言するなどタイミングもよかったのだと思います」(柴田事務局長)

担当者より



質素ながらも心を込めたおもてなしができました。

国連合唱団日本公演実行委員会  
in 東京・栃木県  
事務局長  
柴田静峯さん

AJOSCの助成が最初に決まったことで、他の助成も受けやすくなり本当に助かりました。また1ヵ所から多額のご支援をいただくと制約も受けるものですが、それも回避することができました。公演の成功とあわせ、質素ではありますが職員の方々に心を込めたおもてなしができたと思っています。紙面を借りて感謝いたします。

また鳩山幸前首相夫人に出席を呼びかけたところ二つ返事で承がとれた。東京公演では飛び入り参加し、国連合唱団と「赤とんぼ」を一緒に歌った。国連職員たちも「これほど歓待を受けたことはない」と大感激したようだ。

また公演とは別に、現地の小中学校や高齢者養護施設も訪れた。養護施設で入居者たちと交流した団員たちは故郷の父母を思い出したのか涙を流す人もいた。

「日本は裕福な国だと思っていましたが、学校やこうした施設の食事は貧しいですね」と感想を漏らす人もいた。世界各地を見聞している彼らの発言は重い。

「小学生の生き生きした様子とは対照的に、中学生たちは覇気がありませんでした。我々にとっても少なからずショックでした。また歓迎パーティではもっと職員たちに話しかけてほしいのに、自分たちのグループにとどまる人が多く、国際交流の中での日本の問題点も見えたと思います」

とはいえ、いい面も悪い面もあわせて生の日本を見てもらったことに意義があると柴田事務局長は語る。国連合唱団の理念からいっても建前のつきあい方では意味はない。組織や肩書きではなく、人と人の真の理解と友情が世界の団結に必要なのだと彼らは身をもって教えてくれている。